

小学校体育科の楽しさの積み重ねと学習成果との関係

—楽しさ体験と愛好的態度、学習集団機能との関係をさぐる—

本学教育学部	林 修
田辺市立田辺第三小学校	塩路 文哉
田辺市立上芳養小学校	松葉 貴士
海南市立下津小学校	熊代 悟志
海南市立内海小学校	南 拓哉
本学附属小学校	中山 和幸
本学附属小学校	芝崎 円

I はじめに

体育科の授業では、どの子にも楽しい経験を積み重ねる中でみんなが上手になることをめざしていく必要がある。ここでいう上手になるということは、仲間との教え合いや励まし合いを通して、どの子にも教材の技能的特性に触れるよこびを味わわせていく体育の実現である。

では、仲間と教え合ったり励まし合ったりする楽しい体験を積み重ねれば、結果的に愛好的態度、学習集団機能の向上につながっていくのであろうか。この点を実践的に検討しようとするのが、本共同研究の目的である。

II 資料の収集

1. 対象学級

田辺市小学校 4 年生 2 学級

2. 調査時期

令和 4 年 11 月上旬～12 月上旬

3. 資料の収集

(1) 学習成果の側面

1) 児童の体育授業に対する愛好的態度の変容

奥村ら（1989）が作成した小校 4 年生用の態度尺度を用いて態度測定を行い、対象とした学級の児童の体育授業に対する愛好的態度を把握した。

2) 学習集団機能の変容

菊池ら（1989）が作成した「体育の学習集団テスト」を用いて、単元終了後の学習集団機能を把握した。

(2) 学習行為の側面

1) 単元経過に伴う楽しさ体験の変化

毎授業後に千駄（1984）が作成した「体育の楽しさ尺度」（表 1）への回答を求めた。

この尺度は、「自己目的」（1～7 番）、「環境」（8～10 番）、「人間関係」（11～14 番）、「解放」（15、16 番）の 4 尺度の計 16 項目からなる調査票である。

子どもたちには、意見項目ごとに「はい」「いいえ」のいずれかを選ぶとともに、楽しさの深さとして、項目毎に 4 段階で回答してもらった（以下、楽しさ得点とする）。

表 1. 「体育の楽しさ尺度」の意見項目
（千駄、1984）

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. むずかしい運動をした 2. 気持ちよく運動ができた 3. みんなに自分のせいかをみせた 4. 自分たちで作戦や練習の仕方を工夫した 5. 自分たちで考えた運動をした 6. 気持ちをひきしめて運動をした 7. 前よりも運動がじょうずにできた 8. みんなが協力できた 9. 自由に運動のできる時間があつた 10. 先生のせつめいがよくわかつた 11. 先生や友だちにほめられた 12. ほかの人より運動がじょうずにできた 13. ほかの人に教えてあげた 14. 先生や友だちが自分の考えをとりあげてくれた 15. あせをかいてすっきりした 16. みんなとおなじように運動ができた |
|---|

表 2. 態度測定の結果

	A 学級		B 学級	
	態度スコア	授業の成否	態度スコア	授業の成否
男子	高いレベル	かなり成功	普通のレベル	横ばい
女子	高いレベル	成功	かなり低いレベル	アンバランス

Ⅲ 実践の結果と考察

1. 学習成果の側面から

表 3. 態度測定の商品点の診断結果

	A 学級		B 学級	
	男女共通して向上	男女共通して低下	男女共通して向上	男女共通して低下
よろこび	6. 運動による解放感	—	—	4. 運動に対する能動的な取り組み
評価	12. 課題解決への意欲 13. 仲間との活動 15. 運動の爽快さ 16. 運動の大切さ	—	13. 仲間との活動	18. 自信の高まり
価値	20. 利己主義の抑制 21. 話し合い活動 24. 学習集団の育成 26. 体育の有用性	—	—	27. 運動する意欲

(1) 態度測定の商品結果

表 2 は、態度測定の商品結果を示したものである。

A 学級は、男子が「高いレベル」「かなり成功」、女子が「高いレベル」「成功」となり、男女とも今回の授業に対して、愛好的かつ主体的に取り組んだことが認められた。これに対して、B 学級は、男子が「普通のレベル」「横ばい」、女子が「かなり低いレベル」「アンバランス」とどまった。

次に、意見項目の商品結果から、両学級の授業の特徴について検討する。

表 3 は、態度測定の商品点の商品結果において、男女共通して「標準以上の伸び」もしくは「標準以下の低下」を示した意見項目を学級毎に示したものである。

A 学級で「標準以上」を示した項目は計 9 項目取り出されたが、B 学級では「仲間との活動」の 1 項目に止まった。逆に「標準以下」を示した項目では、B 学級で 3 項目取り出されたのに対して、A 学級では全く取り出されなかった。

A 学級の特徴は、取り出された「標準以上」の項目 9 項目から、子どもたちが仲間と話し合いながら (13. 仲間との活動、20. 利己主義の抑制、21. 話し合い活動、24. 学習集団の育成)、意欲的に課題解決に取り組む (12. 課題解決への意欲)、運動の爽快さや大切さ (15. 運動の爽快さ、16. 運動の大切さ) を味わった結果、体育が役にたつ (26. 体育の有用性) ことを感取した授業であったことが読み取れた。とくに、今回、個人的種目 (器械運動) の授業であったにもかかわらず、学習集団に関わる項目の向上が顕著であったことは興味深い結果であった。

(2) 学習集団テストの商品結果

表 3 は、単元後の「学習集団テスト」の商品結果を学級ごとに示したものである。

A 学級は、男子の「課題達成機能」の商品結果が「不明瞭」となったものの、それ以外は「高い」レベルとなり、総合的には、男子「やや高い」、女子「高い」と診断された。

これに対して、B 学級は、「親和」、「課題達成」のいずれにおいても「不明瞭」となり、結果的に男女とも「中程度」とどまった。

表 3. 学習集団テストの商品結果

		A 学級		B 学級	
		診断基準	総合診断	診断基準	総合診断
男子	親和	高い	やや高い	不明瞭	中程度
	課題達成	不明瞭		不明瞭	
女子	親和	高い	高い	不明瞭	中程度
	課題達成	高い		不明瞭	

こうした両学級の学習集団機能の結果の違いは、先の態度得点においても同様に認められていることから、今回の実践では、A学級の方がB学級よりも学習成果を高めたものと評価された。

次項では、こうした差異が生じた背景について、単元期間中の子どもの「楽しさ体験」の積み重ねから検討する。

2. 学習行為の側面から

(1) 体育授業の楽しさと態度得点

図1は、「楽しさ尺度」の4つの尺度毎の「楽しさ体験」の好意的反応の比率（上段）ならびに「楽しさ得点」の変化（下段）を単元経過に即して示したものである。

学習成果を高めたA学級についてみると、「楽しさ体験」では「人間関係」を除く3つの尺度の比率が単元を通して70%以上のレベルで推移した。その推移をみると、「人間関係」以外の3つの尺度の比率が単元経過に伴って漸増し、とくに「環境」と「解放」の2尺度にその傾向が強く現れた。これら2つの尺度は、「環境」が「8.みんなが協力できた、9.自由に運動のできる時間があつた、10.先生のせつめいがよくわかつた」、「解放」が「15.あせをかいてすっきりした、16.みんなとおなじように運動ができた」という項目で構成されている。これより、子どもたちは単元経過に伴って、解放的な雰囲気の中で、仲間と協力しながら一生懸命に運動に取り組むようになっていったものと考えられる。

しかしながら、「人間関係」の比率は、単元を通して他の尺度のそれよりも低い値のままであつた。

先行研究では、態度得点の高い学級において「人間関係」の比率が単元序盤は今回のように低い値であつたものの、単元経過に伴って漸増し、単元終盤には3つの尺度と同じレベルとなる「楽しさ体験の一元化」が認められている（林、1986）。この点、今回は、態度得点の向上が認められたA学級においても、「人間関係」の比率が単元終盤でも60%レベルにとどまり、一元化する傾向は示されなかつた。先行研究がボールゲームを用いた比較的長い期間に亘る単元であつたことからすると、本実践が器械運動を教材とする7時間の授業であつたことの影響かもしれない。

しかしながら、図1の下段に示した「楽しさ得点」をみると、A学級において一元化傾向が認められた。すなわち、単元開始時には「人間関係」の得点が他の尺度の得点より低い3.5点程度であつた。

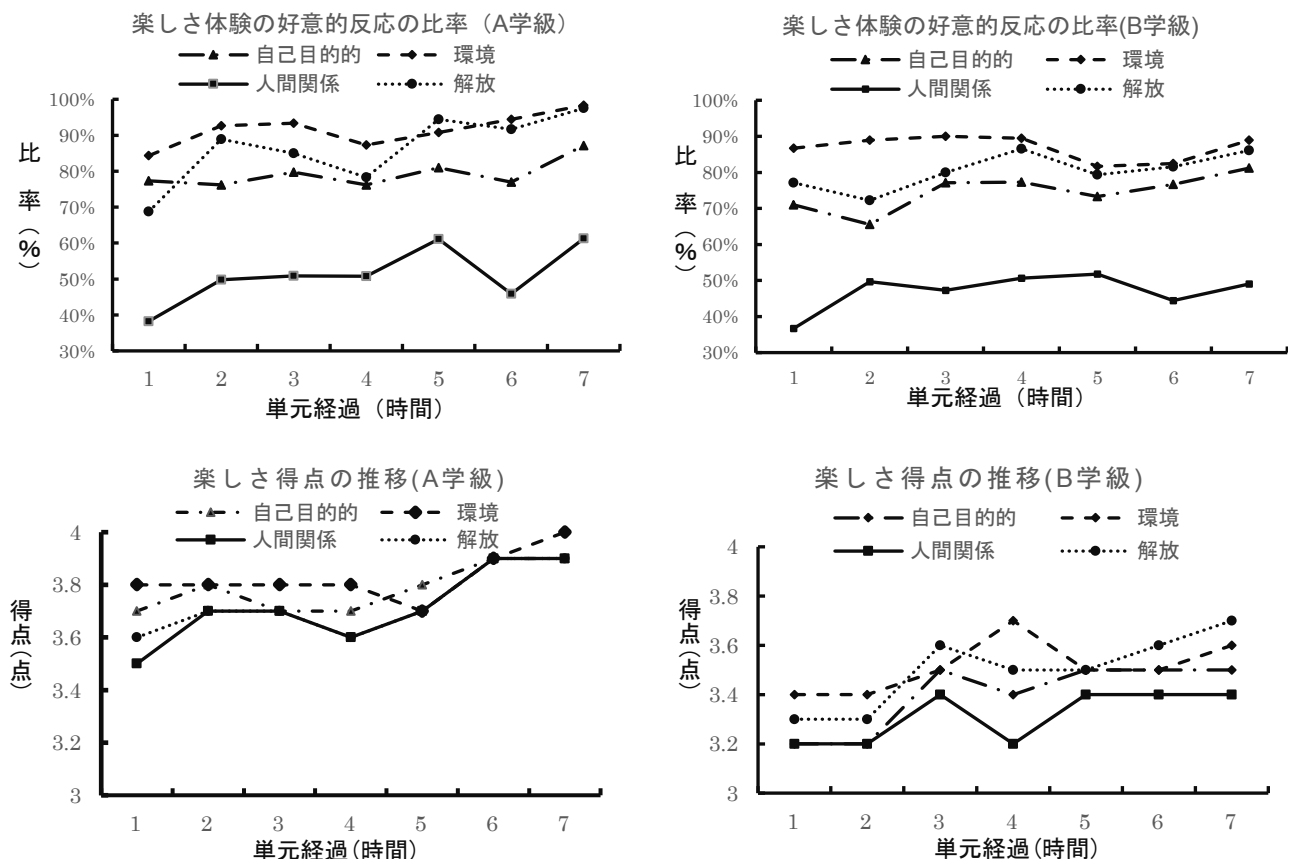


図1. 楽しさ体験の比率ならびに楽しさ得点の単元経過に伴う変化

それが単元経過に伴って漸増し、単元終盤には他の3つの尺度と同程度のレベル(3.9点程度)まで高まるとともに、同じ変化傾向を示すようになったのである。

これに対して、B学級の「楽しさ得点」をみると、いずれの尺度とも、その比率のレベルがA学級よりも2点程度低値のまま推移した。「人間関係」についてみても、単元序盤の3.2点程度から単元終盤になっても3.4点程度でほとんど横ばい傾向のままであった。

これらの結果から、A学級では「楽しさ体験」の一元化は認められなかったものの「楽しさ得点」において一元化したことが結果的に態度得点の向上に結びついたものと考えられる。これに対して、B学級では「楽しさ体験」「楽しさ得点」のいずれにおいても一元化し得なかったことが、結果的に態度得点の向上を抑えてしまったように考えられる。

よって、態度得点の向上には、楽しい体験の積み重ね、あるいは楽しさの深まりが影響しているように考えられる。しかし、今回の資料では、こうした差異が教材や時間設定によるものかどうかについて検討することができない。

(2) 体育授業の楽しさと学習集団機能

本項では、「楽しさ得点」の変化において、一元化傾向を主導した「人間関係」尺度と学習集団機能関係について検討する。

図2は、一元化傾向を示した「楽しさ得点」のうち、「人間関係」尺度を構成する4つの項目(11.先生や友だちにほめられた、12.ほかの人より運動がじょうずにできた、13.ほかの人に教えてあげた、14.先生や友だちが自分の考えを取り上げてくれた)の得点の変化をそれぞれ示したものである。

いずれの項目においても、A学級の方がB学級よりも高いまま推移したことが認められた。その変化傾向をみても、A学級では、いずれの項目の得点も単元経過に伴って漸増する傾向が認められた。とくに、「12.他の人より運動が上手にできた」と「14.先生や友だちが考えを取り上げてくれた」の2項目においてその傾向が強い結果であった。しかし、これら2項目は4時間目に得点が著しく低下した。これは、この時間に何らかのトラブルが生じた可能性と課題の切り替わりの2つの理由が考えられる。そこで、「人間関係」の「楽しさ体験」をみると、こうした著しい落ち込みが認められなかつ

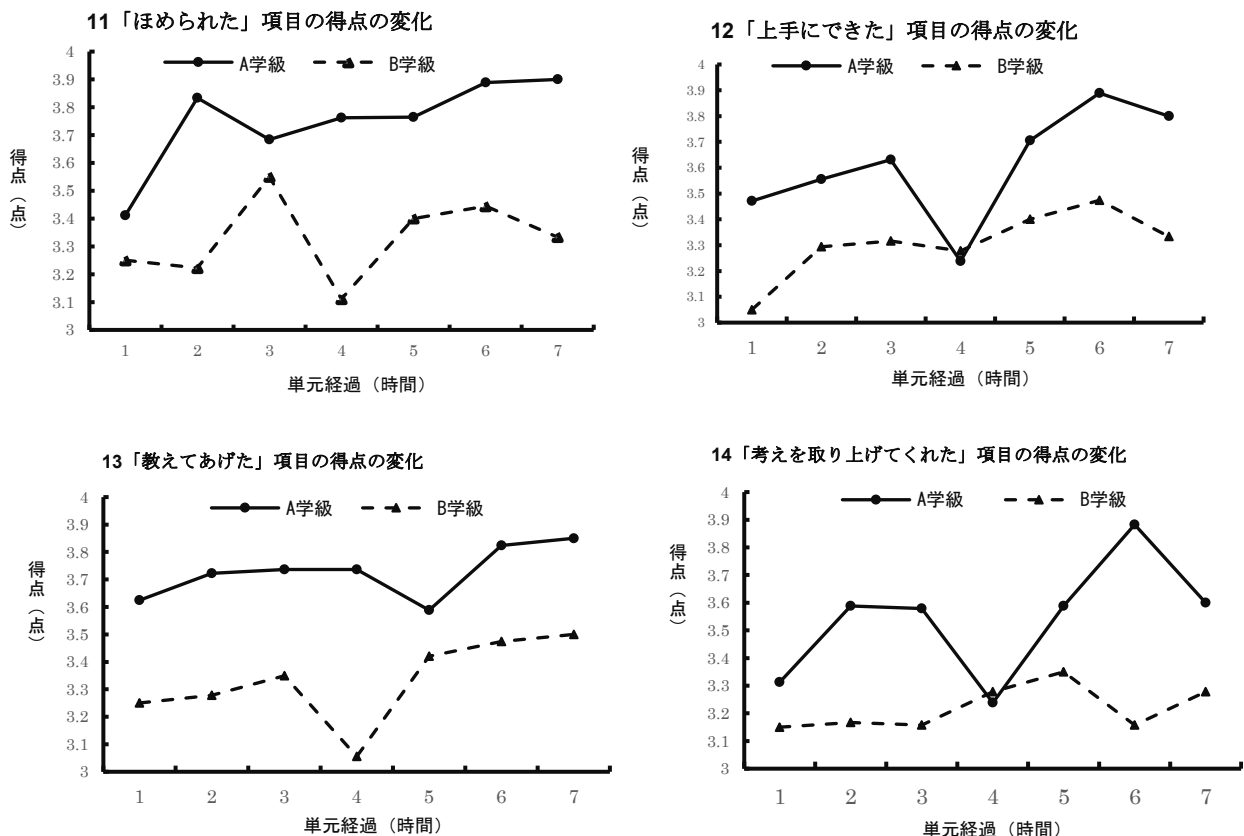


図2. 「人間関係」尺度における4つの意見項目における「楽しさ得点」の単元経過に伴う変化

た。この変化傾向は他の尺度についても同様であった。さらに、A学級の担任に確認したところ、単元前半から後半へと技を変えたとのことであった。よって、この「楽しさ得点」の一時的な低値は学習上のトラブルではなく、課題が変わったことによるものではないかと考えられる。

これらのことから、今回の実践において、学習集団機能が高いと診断されたA学級とそうでなかったB学級との比較から、単元期間中の「人間関係」に関わる楽しさの深まりが学習集団機能の向上をもたらした可能性が考えられる。とくに「人間関係」尺度の中でも運動が上手にできた楽しさと他の友だちや先生が自分の考えを認めてくれた楽しさが強く関係していたことが伺われた。もっと言えば、今回の授業が個人的種目（器械運動）であったため、集団的種目（ボール運動）よりも、技の出来栄が明確であったことが「12.他の人より運動が上手にできた」の楽しさをより強く意識させたように考えられる。また、A学級では、技のポイントを学び合うとともに仲間の技能の伸びをみんなで認め合う観察学習の場を毎時間設定していたことが聴取されている。よって、こうした場における話し合いが「14.先生や友だちが考えを取り上げてくれた」の楽しさの深まりにつながったのではないかと考えられる。

以上、授業中の楽しさ、とくに人間関係における楽しさの深まりが、結果的に学習集団機能を高めていくことに繋がったものと考えられた。加えて、個人的種目による授業の場合、観察学習の場を設定し、技のポイントや個人の技能の向上を認め合う指導を行うことが仲間とともに学ぶ楽しさを味わわせることに繋がるように考えられた。

IV まとめ

今回、小学校体育科において、授業中に楽しい体験を積み重ねれば、結果的に愛好的態度と学習集団機能の向上にもつながっていくのかどうかについて事例的に検討した。

その結果、愛好的態度ならびに学習集団機能が向上した学級では、「楽しさ尺度」の4尺度（「自己目的」「環境」「人間関係」「解放」）の「楽しさ得点」の一元化傾向が認められた。さらに、「人間関係」尺度の「12.他の人より運動が上手にできた」と「14.先生や友だちが考えを取り上げてくれた」の2項目に顕著な向上が認められた。

こうした結果の背景として、今回の授業が個人的種目（器械運動）であったために技の出来栄が捉えやすかったこと、授業中に観察学習の場を設定し、技のポイントや個人の技能の向上を認め合うような指導を行ったことが影響したものと考えられた。しかしながら、今回の資料では、これらの因果関係を明確にすることができなかった。今後の検討課題としたい。

<謝意>

今回の共同研究において、報告書では2学級のみデータとして活用しましたが、実際には10学級の担任の先生に協力いただきました。とくに、協力者の先生方には、自身の授業だけでなく、他の学校にも呼び掛けて資料集にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

(参考文献)

- 1) 奥村基治・梅野圭史・辻野昭(1989)「体育の授業に対する態度尺度作成の試み-小学校中学年児童について-」, 体育学研究, 33-4:309-319.
- 2) 菊池博文・梅野圭史・後藤幸弘・林修・野田昌宏・辻野昭(1989)「体育科の授業に対する態度と学習集団機能の関係-中学生生徒を対象にして-」.スポーツ教育学研究,9-2:65-75.
- 3) 千駄忠至(1984)「体育の学習指導における運動の楽しさの評価」, 第35回日本田愛育学会体育科教育分科会シンポジウム.
- 4) 林修・梅野圭史・藤原千秋・矢田部浩一(1986)「ポコーンパスゲームの授業研究-子どもの学習する道筋を求めて-」, 兵庫教育大学附属小学校研究紀要, 第6集, pp.83-98.
- 5) 小林篤(1978) 体育の授業研究, 大修館書店, pp.170-222. 東京